

コスモス 8月号

第68巻 第8号

◆宮柁ニカレンダー（17）八月の歌

いろ黒き蟻あつまりて落蟬おちせみを晩夏の庭に努力して運ぶ
歌集『晩夏』

いのち尽きた蟬に黒蟻が群がり、少しずつ移動している様を描写した歌だが、どこか暗示的である。一匹では無力の蟻が「あつまりて」「努力して」食料を調達しているのだ。時は晩夏、ものみな疲れ果てた酷暑の庭で、励む蟻をみつめる作者の戦後の決意を感じる。清音の初二句から濁音の多い三句以降へゆつくりとしたリズムで進み、結句八音で重く閉じられる。初出は「読売評論」昭和二十四年十一月号。「よんか」のルビが外され、死の側の「落蟬おちせみ」が視覚的に強く印象づけられている。

（木畑 紀子）